E.H.Eriksonのアイデンティティ理論と社会理論についての考察

河井　亨

1. はじめに

E.H.Erikson は、アイデンティティ理論の生みの親として、また、発達を社会と結びつけた心理－社会的発達論の出発点として広く知られている。Erikson (1968) は、自我が内部と外部を架橋するとした Freud の自我理論の潜勢力を活用しつつ、Freud の心理・性的観点に心理・社会的観点を付け加え、自我アイデンティティの概念を打ち出した。そして、青年期に育まれるアイデンティティの感覚が人生のバランスを約束すると論じた。こうしたアイデンティティについての Erikson の洞察はまた、当時の時代状況についての深い洞察でもあり、アイデンティティという言葉は広く知れ渡ることになる (Friedman 1999=2003, Gleason 1983)。

ところが、時代状況や社会状況の変化の結果、アイデンティティの概念はポストモダン・アプローチからの批判にさらされることになる。このアプローチは、制度が不安定化し、アイデンティティ形成を支える価値がばらばらになり、社会的文脈が断片化しているという状況把握に基づく (Rattansi & Phoenix 1997, Sandstorm & Fine 2003)。そして、Erikson のアイデンティティ理論を人間に本来備わるアイデンティティが文脈を超えて首尾一貫性を持って人生のバランスを約束するという論として把握した上で、現在のアイデンティティは、断片化と首尾一貫性のなさを特徴とすると批判する (Lifton 1993, Gergen 1991 [2001])。

そして、こうした批判の先で Erikson のアイデンティティ理論を廃棄する方向へと進もうとする。Erikson (1968: 45) は、「自我と社会に対する自我の関係とに関する Freud の創意に富む定式化が、当時の精神分析学理論の状態とその時代の社会学的定式化に依存するのは当然であった」と述べていた。同じことが、Erikson にも言えるかもしれない。しかしながら、Erikson が Freud の自我理論の潜勢力を活用したほどに、アイデンティティ理論を廃棄しようとする研究は Erikson の心理社会的なアイデンティティ形成理論の潜勢力を活用するよう努めたと言えるだろうか。本論文では、こうした問題意識から、心理社会的と形容される Erikson のアイデンティティ形成理論における社会理論に光を当て、その再構成可能性を探ることを目的とする[1)]。

2. Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論――これまでの評価

Erikson は、青年期のアイデンティティ形成の議論の基盤をつくった。心理学では、空間と時間を越えて私が同じであることまたは連続であることを扱うと同時に、他者からの承認という形で社会と接続させて議論することを可能にした点に、Erikson の貢献があると評価されている (溝上 2008, 谷 2008)。

精密な史料に基づいてErikson の伝記を記したFriedman（1999=2003）は、歴史や文化や社会が自我に及ぼす影響を考慮しようとしていたFreud よりも進んで、社会組織がどのように家族の構造とその中の個人に働きかけるか、そして文化の中で人がどのように自分を見出すのかにErikson は目を向けようとしたと評している。

また、社会学者や人類学者たちは、Erikson が個人と社会の関係に十分に目を向けてそのアイデンティティ理論を形成したと評価する（Mead 1955, Weigert et al. 1986, Côté & Levine 2002）。歴史・文化・社会の文脈と個人のアイデンティティ形成という視点が重要であることを Erikson のアイデンティティ理論から学ぶことができる（Weigert & Gecas 2005）。

しかしながら、１．で触れたErikson のアイデンティティ理論を批判するポストモダン・アプローチはもちろんのこと、これらErikson のアイデンティティ理論を心理社会的と形容するにふさわしいと評価する研究においても、何をもって心理社会的と形容しうるのかについて Erikson のアイデンティティ理論の内容と構成に踏み込んで十分に検討されているわけではない。

そこで本論文では、第一に、Erikson のアイデンティティ理論がどのような内容と構成であるのかを明らかにする。ここで、何をもってErikson のアイデンティティ理論が心理社会的と形容しうるのかを明らかにする。第二に、なぜそのような構成をとることになるのかを探究する。ここで、Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論の構成を支える社会理論を検討する。それらを踏まえ、Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論の再構成可能性を探る。

３. Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論――自我アイデンティティ形成理論

Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論は、自我アイデンティティ形成を核とする理論である（河井 2011b）。自我アイデンティティの感覚をErikson は次のように説明する。

> 自我アイデンティティの感覚とは、内的な斉一性と連続性を維持する各個人の能力（心理学的な意味での各個人の自我）が他者に対する自身の意味の斉一性と連続性とに合致する経験から生まれる確信のことである（Erikson 1950[1963]: 135）

> （自我アイデンティティの感覚は、）過去の様々な個人に対する個々単独の同一化以上のものなのである。それは、重要な同一化を全て含んでいるが、同時に、それらを変えることによって、独特で合理的に首尾一貫した、それら同一化の統合体をなしているのである（Erikson 1968: 161）。

そして、こうした自我アイデンティティの感覚の発達は、乳児期に萌芽的に始まり、生涯続く過程である。この点に関して、Erikson の８段階（後に９段階）からなるライフサイクルの漸成図式がよく知られており、アイデンティティ形成が青年期のみの問題であるかのような誤解が広く見られる。しかしながら、Erikson 自身が述べるように、アイデンティティ形成は生涯にわたるプロセスなのである。

> 青年期の終わりが、はっきりしたアイデンティティの危機の段階であるからといって、ア

イデンティティ形成そのものは、青年期に始まるわけでも終わるわけではない。つまりそれは、個人にとっても、社会にとっても、その大半が無意識的な、生涯つづく発達過程である（Erikson 1959[1980]: 122)。

このような生涯続く発達過程であるアイデンティティ形成にとって、より基盤となる感覚の形成が重要であると考えられている。Erikson 自身、青年期の自我アイデンティティ形成に先立つアイデンティティ形成について理論化を図っている。

アイデンティティ形成の根源は、最初の自己承認＝認識にまではるかにさかのぼることができる。すなわち（母と）赤ん坊のごく早期の微笑の交換の中に、すでに何らかの形で相互的な承認＝認識と結びついた自己実現とみなすべきものが含まれている（Erikson 1959[1980]: 122)。

したがって、青年期に問題となる自我アイデンティティ形成の基盤となるのは、乳児期の信頼の感覚の形成である。信頼の感覚は、2 つの局面をもっている。第一に、信頼は、これまでの経験の蓄積から、必要なものをあたえてくれる外的存在がつねに同じであることと、連続性を有していることを信頼することを学んだということである。この意味での信頼は、他者を信頼することである。第二に、第一の局面と同時に、すなわち外的存在が外的な予測可能性となると同時に、内的確実性がもたらされる。この意味での信頼とは、自分自身を信頼することである。

そのような経験の一貫性、連続性、斉一性が自我アイデンティティの原基的感覚を準備する。そしてこの自我アイデンティティは、記憶され予想される知覚やイメージから構成される内的集合が存在し、その知覚やイメージは親しく、かつ予測できる事物や人という外的集合と緊密な相互関係にあるという認識に依存する（Erikson 1950[1963]: 247）

そして、信頼の感覚はまた、「大丈夫 All right」という感覚、責任と希望に関わる自分自身になるという感覚、期待と承認＝認識に関わる他者が自分に対して信頼しているような人間になるという感覚の 3 つの感覚に通じる[2)]。後の二つは、基本的信頼の段階に続く自律・自発性・勤勉さの段階での感覚の発達を支える。青年期における自我アイデンティティ形成のためには、基本的信頼の感覚・自律の感覚・自発性の感覚・勤勉さの感覚を育むことが必要である。Erikson 自身は、次のように記している。

乳児が最初期の経験から得る信頼の量は、食物や愛情の表示の絶対量に依存するのではなく、むしろ母親との関係の質に依るらしいということである。母親は、乳児の個々の要求に敏感に応じて世話をし、あわせて、その文化の生活様式の信頼されている枠内で彼女自身一個人として信頼されているという確信に満ちているという特質にうらづけられた育て方で、子どもの心のなかに信頼の感覚を生む。これがアイデンティティの感覚の基礎をかたちづくる。このアイデンティティの感覚は、後の、「大丈夫」という感覚と、自分自身になるという

感覚と、他人が自分に対して信頼しているような人間になるという感覚を結びつける（Erikson 1950[1963]: 249)。

信頼の二局面――他者との信頼関係および自分自身との信頼関係――もまた、自我アイデンティティの形成と関わっている。他者との関係は、空間的な斉一性と時間的な連続性の感覚の支えとなり、自己との関係は、首尾一貫性が関わる。基本的信頼が問題になるときは、外的存在―親―の空間的な斉一性と時間的な連続性という対他関係が重要な問題となるが、自我アイデンティティの感覚が問題になるときには、自分自身の空間的斉一性と時間的連続性をどう認識するかという対自関係とより大きな外的存在との対他関係が問題になる。

ここに、パーソナル・アイデンティティの感覚と自我アイデンティティの感覚は区別されねばならない理論的必然性がある。

> パーソナル・アイデンティティをもっているという意識的な感覚は、２つの同時的な観察に基づいている。時間－空間における自分の斉一性と連続性の知覚、および他者が自分の斉一性と連続性を認識＝承認しているという事実の知覚である。しかし、私が自我アイデンティティと呼ぶものは、存在の単なる事実以上のもの、いわば、この存在の自我質のようなものに関わっている。したがって、自我アイデンティティは、その主観的局面では、次のような自覚である。つまり第一に、その人の個性のスタイルである自我総合の方法にそれ自体の斉一性と連続性があるという自覚である。第二に、このスタイルが、自分が直接経験するコミュニティの重要な他者に対する自分の意味の斉一性と連続性とに合致しているということの自覚である（1959[1980]: 22, 1968: 50)。

自我アイデンティティの感覚はまた、観察だけでなく自我総合の方法の自覚と省察という自分で自分自身へ関与していく活動を伴って形成される。そこでは、対他関係だけでなく、対自関係が問題になっている。

そして、知覚と観察に基づくパーソナル・アイデンティティの感覚は、相互行為状況で問題となるが、より包括的な自覚と省察に基づく自我アイデンティティの感覚が問題になるのは、コミュニティそして社会という文脈においてであるという点からも両者を区別する必要がある。それは、自我アイデンティティの感覚がコミュニティの重要な他者との承認関係およびコミュニティでの「適所」（Erikson 1959: 120）に位置を得ることに基づいているからという理由だけではない。ライフサイクルにおける自我アイデンティティの感覚の形成の中心となる青年期には、それまでの親子関係や仲間関係といった具体的な相互行為以上のものを足場にして、危機の克服が図られる必要がある。その足場こそが、「その輪郭が漠然としていて、要求するものはきわめて直接的な、一つのより大きな単位、すなわち『社会』」（Erikson 1968: 128）だからである。

自我アイデンティティの感覚は、対他関係だけでなく対自関係の相互性 mutuality をまとめ、信頼の感覚やパーソナル・アイデンティティと異なって相互行為状況だけでなく社会との関係において形成される。この意味で、Erikson の自我アイデンティティ形成の理論は、その理論構成の内部に「社会」を含みこんでおり、心理－社会的と形容するにふさわしい理論なのである。

4. Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論――自我アイデンティティと集団アイデンティティの関係性

Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論はまた、自我アイデンティティと集団アイデンティティの相互形成についての理論であり、自我とコミュニティあるいは個人と社会の関係性を捉える理論となっている（河井 2011a）。

> アイデンティティについて考察する際、個人の成長とコミュニティの変化とを切り離すことはできないし、また…、個人の人生におけるアイデンティティの危機と、歴史の発展における現代の危機とを切り離すこともできない。なぜなら、これらはともに互いに他を定義しあうのを助け、真に相互関連的だからである。事実、アイデンティティの形成はその原型としての重要性をもっているような相互作用、すなわち心理的なものと社会的なもの、発達的なものと歴史的なものとの間のすべての相互作用の全体は、一種の心理社会的相対性＝関連性psychosocial relativityとしてのみ概念化されうるものなのである(Erikson 1968: 23)。

Erikson は、子ども・若者の発達は、自我アイデンティティ形成それ自体だけではなく、集団アイデンティティとの関係において理解していた。

> 発達途上の子どもは、経験に対処する自分独自のやり方（自我総合）が、自分の所属する特定の集団アイデンティティの一成功例であるという自覚を通して、そしてまたその集団アイデンティティの空間・時間と自分の生活設計が互いに一致しあっているという自覚を通して、活力ある現実感を獲得しなければならない（Erikson 1959[1980]: 21)。

発達の中で、自我アイデンティティの感覚は、身体的征服と文化的意味が一致し、機能的喜びと社会的認識が一致することで、コミュニティの確実な未来に向かってそれまでの経験から統合し、コミュニティの社会的現実へ自らを組織化するというところにある（Erikson 1968: 50)。

コミュニティそして社会を舞台とする青年期の自我アイデンティティ形成にとっては、コミュニティとの相互承認関係の構築が問題になる。コミュニティは、個人が承認を求めるかぎりにおいて、自らの存在が承認されたと感じる。それゆえに、個人がコミュニティの承認を求めているかどうかが不確定な場合、不信感を示し、さらにはお互いがお互いを拒絶しあう互酬的否定の関係に至りもする（Erikson 1968: 219)。

このようなコミュニティと個人の間に見られる関係こそが、相互性の関係である。相互性の関係は、Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論の接着剤である。すなわち、育てられる乳児と育てる家族（Erikson 1968: 96)、依存される年若い世代と必要とされることを必要とする年長世代、互いに承認を必要とする個人とコミュニティ、いずれの間にも相互性の関係が見出されるのである（３．における信頼の感覚や自我アイデンティティの感覚に関する引用文を参照)。そしてさらに、社会と青年の関係、集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係においても相互性の関係がある。

> 社会は、自らの価値と、自我発達の主要な危機との間に有意義な対応関係を維持することによってのみ、若き成員たちの子ども期の数々の危機から生まれた最大限の葛藤なきエネルギーの処理を、その特定の集合的アイデンティティに任せることができるようになるのである。一連の共同性がさまざまな自我を相互活性化のなかで結びつけている以上、個としての輪郭を護衛すべく機能している自我は決して孤立したものではないと、結論することができるのである。したがって、自我プロセスにおける何かと社会プロセスにおける何かとが、言わば、対応し合っているのである（Erikson 1968 224)。

Erikson にとって、青年期に自我アイデンティティの感覚が形成されるということは、青年期世代と年長世代との間に相互性の関係を築くことであると同時に、個人と社会の間に相互性の関係を築くことでもある（Erikson 1968: 257)。こうしてErikson の心理社会的アイデンティティ形成理論が扱うのは

> 個人の核心に「位置づけられ」、しかもまたその人のコミュニティの文化の核心にも「位置づけられる」プロセス、すなわちもっとはっきり言えば、それら二つのアイデンティティのアイデンティティを確立するプロセスである（Erikson 1968: 22)。

したがって、Erikson のアイデンティティ形成理論は、社会との関係性において形成される自我アイデンティティの感覚を核とし、相互性の関係を接着剤とし、個人とコミュニティ及び社会との関係を自我アイデンティティと集団アイデンティティの関係として捉える点で心理社会的であると結論づけることができる。そして、個人の発達としての自我アイデンティティ形成が、年長世代・コミュニティ・社会のそれぞれとの相互関係を通じて、一連の共同性が活性化され、それと同時に成長する個人にとっての人生のバランスが約束されるという理論構成ゆえに、同時代のヴィジョンとなりえたのである。

5. Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論を支える社会理論の検討

2．で見たように、これまでの Erikson を心理社会的理論として評価する研究も、Erikson の心理社会的アイデンティティ形成を内在的に評価できていたわけではなかった。ここまでの検討を通じ、自我アイデンティティの構成においてコミュニティと社会が不可欠の役割を果たしていることと、自我アイデンティティの形成と集団アイデンティティの形成という自我プロセスと社会プロセスが対応し合って相互関係をなしていることの2点をもってErikson の理論は、心理社会的アイデンティティ形成理論であると結論づけられる。

しかし、Erikson の理論をこれまでよりも踏み込んで心理社会的アイデンティティ形成理論として把握したからといって、Erikson の理論に向けられているポストモダン・アプローチの批判に応えることにはならない。ポストモダン・アプローチの批判にも問題点があるものの、批判が意味しているのは、「Erikson のアイデンティティ理論における相互性の関係の性質、すなわち親が子を育てる力、先行世代が後続世代を導く力、社会が個人に位置づけを与える力への信頼を現

在において自明のものとし保持できない」（河井 2011b: 154）ということである。こうした相互性の関係に向けられている疑念に応えるためには、相互性の関係についてこれまで以上に踏み込んで検討する必要がある。これまで、自我アイデンティティ形成という自我プロセスの中および自我アイデンティティと集団アイデンティティの関係に相互性が見出されてきた。しかしながら、「自我プロセスにおける何かと社会プロセスにおける何かとが、言わば、対応し合っている」にもかかわらず、社会プロセスについての検討は十分になされていない。そこで本論文では、これまでの研究より一歩進んで Erikson の社会プロセスを扱う社会理論を検討し、アイデンティティ形成理論の再構成可能性を探る必要がある。

はじめに、Erikson の社会理論の輪郭を捉えるために、集団アイデンティティ論を検討する。Erikson は、「社会生活は各個人のはじまりとともに始まる」として、子どものしつけへ注意を向けている。Erikson の最初の著作『子ども期と社会』の特徴の一つは、スー族とユーロク族への人類学的アプローチである。こうした異なる社会を比較することを通じ、Erikson は自らの社会理論を形づくっていったと考えられる。そして、そのような人類学的アプローチの対象が、子どものしつけなのである。

> 集団における子どものしつけというのは、一つの集団が経験を組織化する基本的なやり方を、換言すれば、われわれのいわゆる集団的アイデンティティを、幼児の初期の肉体的経験に伝達する方法であり、また、それを通して幼児の自我の萌芽に伝達する方法なのである。…（中略）…
>
> それぞれの集団アイデンティティは、その地理的・歴史的視野（集団的な自我－時間－空間）において大きくことなっており、また、経済的な目標や手段（集団的な生活設計）において根底的に多様である（Erikson 1968: 47-8）。

集団が経験を組織するやり方あるいは集団アイデンティティを伝達するやり方としての子どものしつけに関して、Erikson は、スー族やユーロク族とアメリカ社会とを対比する（Erikson 1950[1963]: 153-6）。まず、前者の社会において、子どもは、幼児期の間、個人主義者であることを許容される。そして、身体が強くなって自信を持つようになると輿論の力で恥をかかされ、伝統に屈服するよう強いられる。これとは対照的にアメリカ社会では、できるだけ早期に身体の機能や衝動や空想を統御するように教え込まれる。こうした機械的社会化の後に、頑健な個人主義者となるよう奨励される。スー族やユーロク族では、社会的行動に対して社会的コントロールが働くのに対し、アメリカ社会では、身体の機能や衝動や空想に働く。ここから、内なる声ではなく明確な名誉と恥辱を軸とする良心のあり方と批判者や観察者がいようといまいと自動的かつ無意識的に働く内化された良心というあり方が帰結する。

Erikson は、さらに、集団的アイデンティティを、集団的な自我－時間－空間を集団的な生活設計に統合する点に着目して、スー族とユーロク族を対比する。そして、文化的表現と自己調整のあり方をはじめ、子どものしつけの対比を通じ、「スー族が力強く遠心的志向であることを発見し、ユーロク族の世界が、用心深く、求心的志向にあることを見出した」（Erikson 1950[1963]: 180）。

表 スー族とユーロク族の対比（Erikson 1950[1963]より作成）

	スー族	ユーロク族
実存の基本的コンフィギュレーション	遠心的移動	求心的世界
文化の境界	境界を画するのは、移動する敵の部隊や生活の資である野牛の群れである。	150マイルの円板形の地球表面のような任意の境界線で周辺を限定されている。
子どものしつけ	無制限の授乳に見られる寛容性とその延長上で噛みたい願望を抑制し、狩人の獰猛さを喚起する	噛めるようになると、突然の離乳により郷愁の残滓が埋め込まれ、獲物を待つ漁師になるようしつけられる
文化的表現	太陽の踊りを囲んで行う行事	魚を止める堰作り
自己調整	自己限定	自己抑制

Erikson は、さらに、等質性の特徴を持つスー族とユーロク族に多様性の特徴を持つアメリカ社会を対置している（Erikson 1950）。スー族の集団的アイデンティティ、すなわちスー族の時間－空間的構造化と生活設計の両方を規定する生活様式は、遠心的移動である。ユーロク族のそれは、求心的世界である。そして両者はともに等質性の文化を実現している。これに対して、エリクソンにとって、アメリカ社会の生活様式は、フロンティアへの拡張という側面では遠心的移動であり、官僚機構という側面では求心的世界である。そしてこの遠心的移動と求心的世界をあわせもつ生活様式から、等質性ではなく、多様性の文化を実現していると Erikson（1950）は考えた[3]。

社会のもとで、各々の文化は、特色ある性格類型を作り出し、文化の概念と理想を一貫したものにまとめていく生活様式を通じて、文化の遺産を相続していく。また、文化は、不安をかきたてつつも、不安から免れる統合を実現する。こうしたことを行なうにあたって、社会は、気まぐれで、無政府的、無秩序であるわけにはいかない。スー族やユーロク族の社会にあっても何かしらの論理が存在するのである。だとすれば、アメリカ社会の特徴を把握するには、無秩序でない社会と規定されるだけでは十分でなく、論理を備えているといっても十分ではない。

エリクソンは、文化について次のように述べている。

> 各々の文化は、不完全さや極端さがその文化独特の様相で結合した特色のある性格類型を作り出す。そしてどの文化においても、剛直さや幻想を発達させる。そのために、その文化が手探りで発展させてきた青写真からは、理想的で、保障され、かつ永久的な状態の出現は不可能であるということを文化は洞察できないでいる。それにもかかわらず、人間は別様の適応、同時に、より合理的な、より意識的な、より普遍的な適応に向かって努力してやまない。それと同様に、われわれはこれらの「直観的な」青写真の性質を理解しようとせずにはおれないのである。（Erikson 1950[1963]：186）

文化が、自らには不可能なものを想定しながら、そのことを洞察できないという点は、スー族、ユーロク族、アメリカ社会のいずれにも共通であるが、「より合理的な、より意識的な、より普遍

的な別様の適応に向かって努力してやまない」のが―スー族とユーロク族には見られず―アメリカ社会に最も顕著に見られる特徴なのである。これは、先に見たそれぞれの集団的アイデンティティの違いによるのである。この合理性が、アメリカ社会の論理をなしている。

また、エリクソンは、合理性について、神経症と未開性とを特徴づけている。

> 神経症とは、非合理な思考傾向が比較的高度な合理性と相いれないで分離している個人の状態を指すが、一方、未開性は、合理的な考え以前の考え方が、技術によって可能になったすべての合理性と統合された人間の組織の状態である（Erikson 1950[1963]：184）。

> 今日の患者は、何を信じそしてどんな人間になるべきか、或いは実際、どんな人間でありえたか、またなりえたか、という問題でもっとも悩んでいる。一方、初期の精神分析の患者は、自分が誰であり、どのような人間であるかを知っていると思っていながら、その彼が考えているような人間になることを妨げている抑制のために、もっとも悩んでいた（Erikson 1950[1963]：237）。

Erikson は、神経症を不合理な「論理」、未開性を合理性以前の「論理」と呼んでいる。このことからも、アメリカ社会がどのように運動するかという論理は、不合理な「論理」とも、合理性以前の「論理」とも区別されるような合理性である。

そして、こうした合理性を追求してやまない運動を通じて達成されるアメリカの集団的アイデンティティについても Erikson は記している。まず、アメリカ社会を特徴づけるのは、次のような確信である。

> アメリカは、誤りを犯すことができるほど余裕のある国であるという確信。また、アメリカは、定義からして、尽きることのない資源、計画のヴィジョン、行動の自由、進歩の速度などの点で世界中のいかなる国よりも優っているので、社会的実験を発展させ、試験し、完成させることのできる時間や空間が無限に存在する国である、という確信だ（Erikson 1968：69）。

そして、こうした確信の基礎にアメリカの集団的アイデンティティはある。「アメリカ的生活様式とは、より大きく有利な機会を自由につかむためには、常に暫定状態にとどまっていなければならぬという不断の要求にある。それを支配しているのは、二者択一、対照的存在、対極などの間にある緊張である」（Erikson 1968：65）。

> アメリカの集団的アイデンティティ形成のプロセスは、個人が自律的選択を慎重に暫定的なものにしておける deliberate tentativeness ある種の要素を保ち続けることができるかぎり、それは個人の自我アイデンティティを支えるもののようである。個人は次にどんな処置をとるかは自分次第であり、どこに留まっていようと、どこへ行こうとしていようと、もしその気になれば、いつでもそこを去ることも反対の方向へ行くこともできるのだ、という

確信がなくてはらない。この国では移住者は移動を続けるように命じられるのを望まないし、定住者はそこを動くなといわれるのを望まない。なぜなら、各人の生活様式 life style(および家族の歴史)は潜在的可能性として正反対の要素 alternative を含んでおり、どちらを選択するかは彼のもっとも私的で個人的な決断によるべきだと考えたがるからである。(Erikson 1950[1963]: 286, 1968: 67, 1980: 42-3)。

したがって、現在職分を果たしているアメリカ人は、極端な対象や急激な変化の歴史の継承者として、動的な両極性の暫定的な組み合わせ a some tentative combination of dynamic polarities の上にかれの最終的な自我アイデンティティの基礎を置いているのである(Erikson 1950[1963]: 286)。

アメリカ社会は、このような慎重な暫定性をもって、伝統の持続と革新の実現、そして合理性を追求し、多様性の文化を実現している。

アメリカ社会は、慎重な暫定性に基づいて、多様性の文化を実現しながら、「より合理的な、より意識的な、より普遍的な別様の適応に向かって努力」するという運動をするのである。したがって、このような運動をするアメリカ社会は他でもなくウェーバーやパーソンズが見、探究した近代社会である。

近代社会としてのアメリカ社会は、合理化されると同時に合理化し、さらに高度な合理性へ自らを更新するべく無限に漸近運動していくのである(佐藤 1993)。このことは、言い換えれば、近代社会の無限漸近運動は、ある合理性(それはさらにそれ以前の合理性からやってきた合理性である)からさらなる合理性へと、自らを合理化し、同時に合理化されるという再帰的運動である(Beck et al. 1994)。そしてこの近代社会は、この運動の論理である合理性を首尾一貫した原則として、それを支柱に統合体を構成している。このように、秩序化され統合体をなしている近代社会の運動が、個人のアイデンティティ形成プロセスと対応し合う社会プロセスである[4)]。

ここまでの検討から、自我プロセスと社会プロセスの対応関係というEriksonの心理社会的アイデンティティの構成が、以下の内容からなることが明らかになった。自我プロセスは、対他関係における空間的斉一性と時間的連続性を対自関係における合理的に首尾一貫した統合体へとまとめ上げていく自我アイデンティティ形成プロセスである。社会プロセスは、遠心的移動と求心的世界をあわせもつ生活様式をもとに合理性を追求することで多様性の文化を実現し、慎重な暫定性を保持することで伝統の継承と革新の実現を同時追求する集団アイデンティティ形成プロセスである。この自我アイデンティティ形成プロセスと集団アイデンティティ形成プロセスが対応し合っている。さらにこの対応関係は相互関係であり、青年期において相互活性化する。青年期は、自我アイデンティティの感覚をまとめ上げる時期であると同時にコミュニティとの間に相互承認関係を築く時期でもある。そこで、「個々人はそのアイデンティティが確認され、社会はその生活様式が刷新される」(Erikson 1968: 134)。こうして、Erikson の社会プロセスに関する理論すなわち社会理論は、自我プロセスに関する理論すなわち自我アイデンティティ形成の理論と双対をなして心理社会的アイデンティティ形成理論を構成しているのである。

6. おわりに

本論文では、Erikson のアイデンティティ理論がどのような意味で心理社会的と形容しうるのかを明らかにし、自我アイデンティティ形成理論と対をなす社会プロセスの理論の構成を明らかにしてきた。確かに、時代状況や社会状況の変化の結果、Erikson が依拠した相互性の関係は自明のものとすることが難しくなったかもしれない。しかし、本論文で見出された Erikson の社会理論は、ウェーバー以降の社会学理論が提示してきた社会理論と親近性が高く――パーソンズならば、収斂というかもしれない――、当時のアメリカ社会についての深い認識を可能にするものであったと評価できる [5)]。Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論は、そうした当時の社会理論と共鳴するものであった。そして、時代状況や社会状況の変化を捉えようとする努力が社会学理論において継続されている。だとするならば、社会理論の発展に基づいて、心理社会的アイデンティティ形成理論を再構成するということがありうるのではないか。これが、本論文で見出された Erikson の心理社会的アイデンティティ形成理論の再構成可能性である。今後は、この課題に取り組む必要があるだろう。

注

1) 本論文では、Erikson の心理社会的アイデンティティ理論に検討対象を限定する。Erikson は、後年、『青年ルター』や『ガンディーの真理』において歴史的転換とアイデンティティとのダイナミックな関連について論じていく（西平 1993）。この展開を踏まえた考察は、今後の課題である。

2）ここで、「大丈夫」という基本的信頼の感覚が、Giddens（1991）が存在論的安心としたものと考えてよいだろう。

3）遠心的移動と求心的世界がアメリカ社会の多様性の文化を実現するという社会理論は、Erikson を離れてさらに検討する必要のある課題である。

4）Erikson（1959[1980]: 53）は、個人のライフサイクルにわたる漸成原理に基づく発達を「機能的統合体 functional whole（1980 年版では functioning whole）」の形成される過程としている。これが近代社会の運動に対応する個人の発達過程の表現の一つであると考えられる。

5）3）と同様、社会学理論それ自体の検討は、本論文の課題を越える。今後の課題としたい。

文献

Beck, U., Giddens, A., & Lash, S., 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*. Cambridge: Polity Press.（=1997, 松尾精文・叶堂隆三・小幡正敏訳『再帰的近代化―近現代における政治、伝統、美的原理』而立書店）.

Côté, J.E., & Levine, C. G., 2002, *Identity Formation, Agency, and Culture：A Social Psychological Synthesis*, Mahwah, NJ：Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

Erikson, E.H., 1950, *Childhood and Society,* (2nd ed.), New York: Norton.（=1977, 仁科弥生訳『幼児期と社会 1』みすず書房, =1980, 仁科弥生訳『幼児期と社会 2』みすず書房）.

――――, 1959 [1980], *Identity and the life Cycle*, New York: Norton.（=2011, 西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房）.

――――, 1968, *Identity: Youth and Crisis,* New York: Norton.（=1982, 岩瀬庸理訳『アイデ

ンティティ』金沢文庫)

Friedman, L.J., 1999, *Identity's Architect: A Biography of Erik H. Erikson*, Scribner.（=2003, やまだようこ・西平直監訳『エリクソンの人生―アイデンティティの探求者―』上・下，新曜社）.

Gergen, K.J., 1991[2001], *The Saturated Self*, New York: Basic Books.

Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age,* Stanford: Stanford University Press.（=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会』ハーベスト社）.

Gleason, P., 1983, "Identifying Identity: A Semantic History," *The Journal of American History,* 69(4): pp.910-931.

河井亨，2011a，「自己とコミュニティの関係についての社会学的考察―G.H.ミードと E.H.エリクソンの再読を通じて―」『京都大学大学院教育学研究科紀要』57 号, pp.641-653.

――――, 2011b，「アイデンティティ形成についての社会学的考察――Erikson のアイデンティティ理論とそれ以降のアイデンティティ研究の検討」『現代社会学理論研究』5 号, pp146-158.

Lifton, R.J., 1993, *The Protean Self: Human Resilience in an Age of Fragmentation*, New York: Basic Books.

Mead, M., 1955, "The Scholar's Scratch Pad," *American Scholar,* 24, pp.378-382.

西平直，1993，『エリクソンの人間学』東京大学出版会.

溝上慎一，2008,『自己形成の心理学――他者の森を駆け抜けて自己になる』世界思想社.

Rattansi, A., & Phoenix, A., 1997, "Rethinking Youth Identities: Modernist and Postmodernist Frameworks," J. Bynner, L. Chisholm, & A. Furlong, *Youth, Citizenship and Social Change in a European Context,* Aldershot: Ashgate, pp.121-150.

Sandstrom, K.L., & Fine, G.A., 2003, "Triumphs, Emerging Voices, and the Future," L.T., Reynolds, & N.J., Herman-Kinney, eds., *Handbook of Symbolic Interactionism*. Lanham: Altamira Press, pp.1041-1057.

佐藤俊樹, 1993,『近代・組織・資本主義――日本と西欧における近代の地平』ミネルヴァ書房.

谷冬彦，2008,『自我同一性の人格発達心理学』ナカニシヤ出版.

Weigert, A. J., & Gecas, V., 2005, " Symbolic Interactionist Reflections on Erikson, Identity, and Postmodernism," *Identity: an International Journal of Theory and Research*, 5(2), pp.161-174.

Weigert, A. J., Teitge, J. S., & Teitge, D. W., 1986, *Society and Identity: Toward a Sociological Psychology*, Cambridge, NY: Cambridge University Press.

（日本学術振興会特別研究員 高等教育開発論講座 博士後期課程３回生）

（受稿 2012 年 9 月 3 日、改稿 2012 年 10 月 31 日、受理 2012 年 12 月 27 日）

A Consideration on Erikson's Identity Theory and Social Theory

KAWAI Toru

This paper attempts to clarify the potential of Erikson's theory. First, I investigated Erikson's theory on Ego identity formation. I found that Erikson saw it in relation to community and society, which is mutual relationship. Second, I considered the relationship between individual and society in Erikson's theory. I found that Erikson saw this relationship as the relationship between ego identity and group identity which is constructed and recognized mutually. In these two points, I can evaluate Erikson's identity theory as psycho-social theory. In addition, through examining Erikson's theory on social process, I found the identical relationship between ego process and social process. This means that Erikson's identity theory can revive by means of reconstructing the theory on social process.